

山と博物館

第41巻 第3号 1996年3月25日

大町山岳博物館



冬のニホンカモシカ

撮影 千葉 彬司

飼育カモシカの血統更新の必要性

千葉 彬司

日本特産のカモシカが飼育されはじめたのは、戦後の二十年代からである。カモシカの飼育は上野動物園からはじまった。昭和二十一年二月、富山県で捕獲された三頭を皮切りに、昭和三十八年までに収容されたカモシカは二十五頭にのぼった。そのうちの一頭が九年十一月飼育された他は短期日で死亡し、他の施設も同様な結果に終わっている。このように戦後の二十年代に開始されたカモシカ飼育は、惨憺たる結果に終わり、カモシカは飼いにくい動物「難獣」と言われた。

昭和三十七年の全国博物館大会で「カモシカなど天然記念物の保護については、文化財保護委員会、林野庁が中心になって、全国の動物園、博物館が協力して共同捕獲、共同飼育を行い、その増殖を行うことが急務である」という発言があり、翌三十八年、「特別天然記念物カモシカの保護についての打ち合わせ会」が開催された。現在の「カモシカ会議」の前身である。

カモシカの生息域に近い五施設が指定され、「山元飼育」が本格的に開始されたのは、昭和四十年のことである。飼育の成功と共に日本カモシカセンターをトップに繁殖にも成功し、神戸市立森林植物園、立山風土記が丘カモシカ園（現・富山県立山博物館）、大町山岳博物館が続いた。その後、繁殖したものが他の施設に分散されるようになり、外国への移動も行われた。繁殖個体が分散されるようになって、新たな問題が生じてきた。同一系統のカモシカの増加である。現在の全国の飼育数は百一頭、そのうちの五十頭、四十九パーセントは立山博物館の系統で、そのうち近交係数を持つものは二十五頭、五十パーセント、次いで中津川市夜明けの森が二十六頭、二十五・七パーセント、近交係数を持つものは二頭、七・七パーセントとなっている。

国内の飼育カモシカの多くが、同一系統で占められつつある現状から、国内のカモシカの存続を図る意味からも、「カモシカ会議」の中で計画的に他地域の個体を入れ血統更新を図っていく必要があるのではないかと思うのである。

(大町山岳博物館館長)

ノウサギ猟

—威嚇猟を中心として—

長沢 武

ノウサギとその捕獲法

ノウサギは山野で普通に見られる手ごろな獣で、山村では一般に山兎と呼んで、いろいろな方法で捕らえ、蛋白源として食用に供してきた。それは身近な里山にいて簡単に捕らえることができたからである。

猟銃が普及してきてからは、猟銃で撃ちとるのが一般的猟法となったが、鉄砲は米二俵の代価以上もする高価なもので、税金もかかるし一般庶民が簡単な遊びとして誰もが行えるものではなかった。

そこで本稿では、山村の人たちが、農閑期の暇な時期に遊びとして行ったり、農作物の害獣駆除として自前で作り、ノウサギを捕らえた方法についてとり挙げてみたい。

1、網張り猟 ノウサギが息息する雪の山野に、高さ一・三メートル、長さ五十メートル前後の網を張り、大勢の勢子を使って雪穴に仮眠しているノウサギを追い出し、逃げようとしてこの網にかかったものを捕らえる猟法で、兎追い（長野）、兎ホイ・網ホイ（富山・石川）などと呼んだ。ホイとは飛騨や富山・石川県地方で声をたてて追うことをいう。

2、くくりわな猟 細い針金で輪を作つて兎の通り道に仕掛け、兎がこの輪に首をつつ込むと自然に輪がしまつて、兎は首を吊つて死ぬ仕掛けになったもの。仕掛けが簡単で素人の誰にでもできるので広く行なわれ、猟期も冬ばかりでなく四季を通じてできるので、

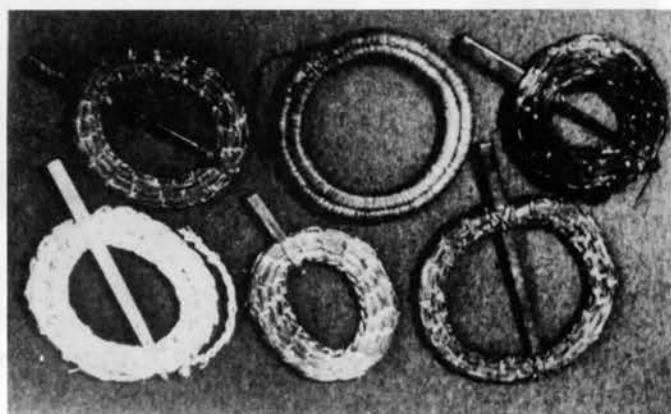
大豆や稲などを食い荒らしにくる兎退治にも用いられた。

3、おせ（おし） この猟法は主にクマを捕るのに用いた猟法で、細木を柵状に編んで斜に立てかけ、これが倒れないように支木を一本立て、これに餌を付けておき、兎がこの餌を食べに来ると引っぱると支木がはずれておせが倒れ、兎はその重みで圧死するもの。兎の場合はおせも小さく簡単なものでよかつたが、クマ用のものはがっちり大きく、上には重い石をたくさん載せて作つた。

4、おり（おとし） 動物を閉じこめて外へ出られないようにしたものをおり（檻）というが、ノウサギを捕らえるのに細木を編んで籠状に作り、内に餌を入れてこの餌と入口の戸を直結させておき、兎が餌につられておりの内に入り、餌をくわえて引つ張ると入口の戸が閉つて兎は外に逃げられなくなる仕掛けのもので、兎捕りの金網の籠と同じ仕組の器具。

5、落とし穴 兎の通り道に穴を掘つておき、ここを通つた兎が落ちて出られなくなつているところを捕るといふ、最も原始的な方法で、穴の深さは一・二メートル、直径五十センチ程のもの。冬は雪を、無雪期は土を掘つて作つた。飛騨の神岡地方で盛んに行われた。

6、放鷹猟 クマタカを使ってノウサギを捕らえる一種の鷹狩りで、山形県や秋田、岩



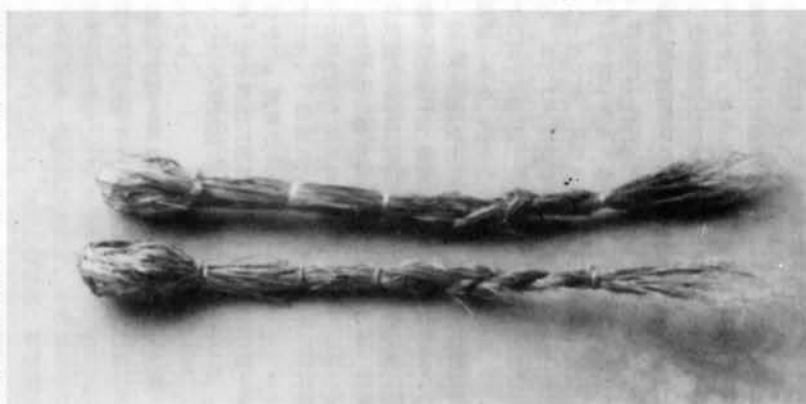
東北地方のワラダ各種「マタギ狩猟用具」 碧祥寺博物館から

手県地方の農民の間で、冬の副業として行われた。江戸時代將軍家や大名の間で盛んだった鷹狩りは、明治維新と共に廃止になったが、この放鷹猟は、明治になってから盛んになり、クマタカが国際保護鳥に指定される昭和五十年代まで行われていた。

7、威嚇猟 ノウサギが日中仮眠している雪穴を探し、この穴を目掛けて、天敵のタカが襲ってきた羽音に似せて、棒切れや薬で作つた器具を投げ、この音に驚いて兎が雪穴深く逃げ込んだところを生捕る猟法で、太平洋戦争後も各地で行われていた。

威嚇猟の地方名と器具の違い

ノウサギの威嚇猟を調べて歩いて感じたことは、原理はいずれも同じであるが、雪深い



投げ越し 小谷村中土千沢 小林浅吉作

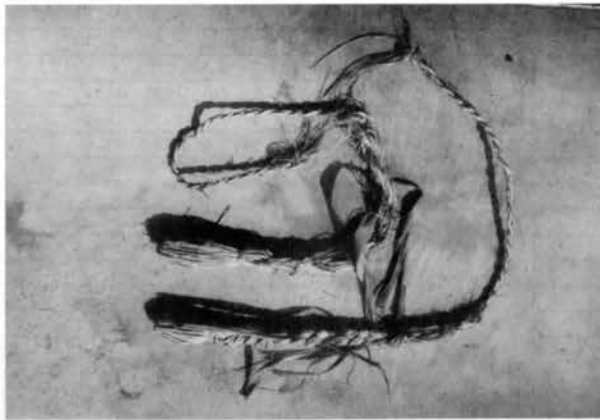
地方でのみ行なわれており、器具や名称に地域により多少の違いがあることが分かつた（表1参照）

これらの器具は藁製のものや木製のものに大別することができ、藁製のものには、①CD盤状のワラダ型と、②犬の尾のようなワテ型の二つに、木製のものは③カンジキ状のマルウチ型と、④枝の付いた「状の棒切れのバイ型に細分することができる。

①は藁を親指大の太さからげたものを長く作り、これを渦巻状に巻いて直径三十センチ

表-1 ノウサギの威嚇強分布状況表

県	郡 市	町 村	地区名	有無	名 称	報告・文献	備 考
長野	北 安 曇	小 谷	北 小 谷	○	ナゲコシ	松沢 理一	小石をワラで包み編んだもの
〃	〃	〃	中 土	○	ツツコ投	小林 浅吉	追い込みともいう、同上
〃	〃	白 馬	菅	○	ワチ捕り	横田 藤衛	同 上
〃	〃	〃	切 久 保	○	〃	福島 藤衛	〃 ほろ切やしな皮を付ける
〃	〃	〃	深 空	○	〃	郷津善一郎	〃 〃
〃	〃	〃	佐 野	○	〃	長沢吉兵衛	〃 〃
〃	大 町 市		平	×		今水 喜一	雪少なくわり、知らない
〃	北 安 曇	松 川	鼠 穴	×		井沢 功次	〃 〃
〃	〃	美 麻	新 行	×		高橋 政幸	〃 〃
〃	南 安 曇	三 郷	小 倉	×		大倉 義照	〃 〃
〃	〃	安 曇	番 所	×		福島 立吉	聞いたことはある
〃	〃	奈 川	川 浦	×		奥原喜運次	〃
〃	木 曾 曾	上 松 町	西 小 川	×		山室 孫吉	知らない
〃	〃	南 木 曾	妻 籠	×		藤原 喜六	〃
〃	上 水 内	戸 隠	上 楠 川	○		原山 寅重	弓はウツギ矢はヨシで
〃	〃	信 濃 町	高 沢	○	ペー打	横川 義雄	棒状のもの
〃	飯 山 市		一 の 川	○	ペー投	水野 修平	〃
〃	〃		大 川	○	ペーブチ	山室 隆治	〃 松の小枝をつける
〃	〃		屋 敷	○	〃	〃	沓津、富倉でも盛んにやる
〃	〃		温 井	○		北条 良三	棒を投げてとる話を聞いた
〃	下 水 内	豊 田	浦 井	○	ペー投	水野 修平	棒状のもの
〃	下 高 井	木 島 平	上 木 島	○		外山 寅治	〃
〃	〃	山ノ内町	須 賀 川	○		小林 博	〃
〃	〃	野沢温泉	市 川	○	バセドリ・ペードリ	江尻 昭二	〃 及びワラ製円盤状のもの
〃	下 水 内	栄	秋 山	○	ワダラ	山田 重雄	ワラ製ドーナツ型で棒を刺す
新潟	糸魚川市		真 光 寺	○	バイ打	松木 与一	棒状のもの、小枝をバイタという
〃	〃		御 前 山	○		田原 豊春	雑木や杉の枝の葉付
〃	〃		大 所	○	オイコミ・バイ打	山岸 佐丞	棒又は手拭に雪玉を入れ
〃	〃		夏 中	○	バイ打	伊藤 留治	棒状杉の葉をつける
〃	中 魚 沼	津 南 町	結 東	○	ワダラ・ベエ	「山と猟師」	小枝をカギ状、ワラ製円盤
〃	十 日 町 市			○	ズッペ打・バイ打	博物館員	同上
〃	中 頸 城	妙高高原	杉ノ沢	○	バイ打	山川 善次	棒状のもの
〃	東 蒲 原 郡	上 川 村	鎌 取	○	〃	天野 武	棒に数カ所切目を入れそこへ杉葉を挿す
〃	南 蒲 原 郡	下 田 村	五 百 川	○	バイカケ	〃	棒の先を割りナラの枯葉を結付ける
〃	〃	〃	吉 ヶ 平	○	〃	〃	棒切れ又は棧俵
富山	下 新 川	宇 奈 月 町	宇 奈 月	○		佐々木弥左エ門	棒を投げて
〃	魚 津 市		島 尻	×		小林小左エ門	
〃	中 新 川	立 山 町	芦 崎 寺	○	バイ投げ	佐伯 利雄	棒状のもの
〃	〃	〃	座 主 坊	○	〃	〃	〃
〃	〃	上 市 町	西 種	○	バイドリ	「富山民俗」31	〃 枝の元二寸残す
〃	婦 負	細 入	笹 津	○		野尻松之助	棒切れ
〃	〃	山 田	赤 目	○	バイ打	松林 義治	〃
〃	東 砺 波	利 賀	利 賀	○	〃	野原 真信	〃
〃	〃	井 波 町	連 代 寺	○	〃	久患 清蔵	棒状のもの
〃	西 砺 波	福 光 町	吉 見	○	バイ打・バイ投	「富山民俗」40	〃
岐阜	吉 城	古 川 町	戸 市	×		森 政夫	
〃	〃	神 岡 町	山 田	○		宮越 正一	棒状のもの、聞いただけ
〃	〃	上 庄 宝	一 重 ヶ 根	○	バイ打	松田 松成	〃
〃	大 野	莊 川	一 色	○	バイタ飄	三島 一郎	〃
〃	〃	白 川	萩 町	○	ポー打	鈴木 正雄	〃
〃	〃	清 美	三 日 町	×		村田 栄造	
〃	〃	朝 日	青 屋	×		上牧 敏郎	
〃	〃	高 根	野 麦	×		中谷 政雄	
〃	〃	〃	日 和 田	×		中田 福松	
〃	郡 上	高 鷲	鷲 見	○		三島喜右エ門	ワラ製円盤状のもの
石川	石 川	白 山 麓		○	シウタ・シブタ	天野 武	木製カンジキ状輪
〃	河 北	浅 川		○	ブテ打・ボテ打	〃	
〃	金 沢	橋 尾	魚 堀	○	〃	〃	「加能民俗研究」13号
秋田	仙 北	一 戸		○	サンダラ・ワラダ	武田宇市郎	ワラ製ドーナツ型円盤状
〃	北 秋 田	阿 仁 町	打 当	○	ワラダ	「マタギ狩猟用具」	〃
〃	雄 勝	羽 後 町	仙 道	○	ワラダ・マルウチ	武田宇市郎	〃 細木で輪、棒状のものはベエ
〃	〃	皆 瀬	湯 ノ 沢	○	〃	「マタギ狩猟用具」	
〃	由 利	鳥 海	笹 子	○	マルカケ	〃	ブドウつるなどを輪にしたもの
山形	最 上	真 室 川 町	川 ノ 内	○	ワ	佐藤 貢	小枝を輪にしたもの
〃	西 村 山	西 川 町	志 津	○	ワラダ	〃	ワラ製円盤状
岩手	和 賀	湯 田 町	越 中 畑	○	〃	「マタギ狩猟用具」	
〃	〃	〃	本 屋 敷	○	〃	〃	



ワテ 白馬村 郷津善一郎作

子程にしたもので、地域によっては芯を欠いたり、投げ易いように木片を挿して用い、山形・岩手・秋田県でワラダ、長野県栄村や新潟の一部でワダラと呼ぶ。

②は長野県の白馬・小谷地方にのみ見られるもので、一握りの藁の根元を結び、ここへ子供の握りこぶし大の石を入れ、その先は編んで尾状にし、途中には投げた時に鷹の羽音が出るようシナノキの皮や杉の葉を挟んで仕上げる。名称は白馬村でワテ、小谷村ではナゲコシまたはツトッコと呼ぶ。

③はフジ、ヤマブドウ、コマユミなどの蔓性またはネソ用の木を用いて径三十センチくらいの輪を作り、この輪に十文字またはカンジキの縄のように細かくからって、途中で鳥の羽根やほろきれを付けて仕上げたもの。名称は秋田県でマルウチまたはマルカケ、山形県

真室川町でワ、石川県白山麓でシュータまたはシブタ。

④は一番広く使われていたもので、木の枝の親指大の太さのものを四十一六十センチに切り、元には僅かに小枝を残して「状にしたもので、地方によっては皮にナタ目を入れて、投げた時に鷹の羽音がでるよう工夫したものである。名称は富山県でバイ、新潟県でバイ、ベエ、ベエ、長野県の飯山・上水内地方でベエ、岐阜県でバイ、バイタ、ポー、秋田でベエと呼ぶ。

ノウサギの隠れ家と発見法

ノウサギは夜間行動し、昼間は雪穴で仮眠している動物である。彼らは明け方近くになると、仮眠に適した木の根方の雪穴を探し、それが見つかる特殊な足どりをしてその穴に跳び込み隠れる。そして穴の入口近くで集音機のような耳をそばだて、タカなどの外敵が近づいてこないか四六時中警戒しながら日中をすくす。

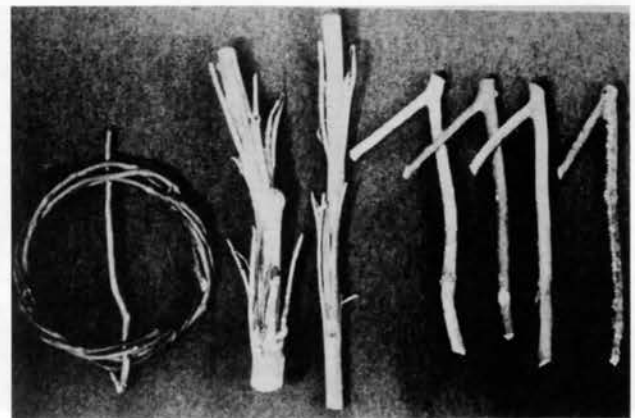
この穴に入る時の特殊な足どりは、彼らにとっては自分の足跡をくまらず術と思っていられるようであるが、狩猟者にとってはこの変わった足跡を発見することが、彼らの隠れ家を探し出す確かな手掛りなのである。特殊な足どりは先ず普通に跳んでいき、急に後戻りして、また前進し、最後に二メートルも大跳びに横に跳んで隠れ穴に跳び込む。

猟具の投げ方と兎の捕らえ方

ノウサギが日中仮眠している雪穴をネット（寝所）と猟師はいう。これを探す最も条件の良いのは朝方少し降雪のあった日で、威嚇猟はこんな日をねらって行う。

ネットを発見すると猟師は遠巻きに穴の裏側へ回り、三十メートルくらいの距離から、持

て



東北地方のマルカケ、ハエ各種「マタギ用具」 碧祥寺博物館から

第34巻第8号(平成元年8月)
白馬岳の高山植生復元 その後

土田勝義

モリアオガエル産卵地二題 宮田 渡

第34巻第10号(平成元年10月)
信濃木崎夏期大学の七十有余年を歩む 荒井和比古

第34巻第11号(平成元年11月)
草本植物の地下茎一、二、三の高山植物にふれて 清水建美

付属園茶のみばなし(2) 北條廣美

第34巻第12号(平成元年12月)
山博友の会の一年 友の会事務局

第35巻第1号(平成2年1月)
鳥類の盲腸機能 唐澤 豊

誤り伝えられたウエストンの写真 田畑真一

第35巻第2号(平成2年2月)
寶石の話 平林照雄

付属園茶のみばなし(3) 森山祐介

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありませんら、一部一〇〇円でおわけします。巻号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。(送料当方負担)

博物館だより

参の猟具を矢つき早やに穴の上方目掛けて投げながら穴に近づくと、すると兎は天敵のタカが近づいたと思ひ、穴の奥深く逃げ込んで身をすくめる。

猟師はその穴の口を足でおさえ、ゆっくりと雪穴深くにいる兎を手づかみにし生捕るのである。

(山岳博物館嘱託員)

バックナンバーのお知らせ(13)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですがご了承ください。

第34巻第6号(平成元年6月)

木崎湖に発生した淡水赤潮について

岩魚釣りの漢

林 秀剛
長沢正彦

山と博物館 第41巻 第3号

一九九六年三月二十五日発行
発行所 千歳長野県大町市 TEL 0261-1111
印刷所 大町山岳博物館
大町山岳博物館
大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号055401713353